

芸術って何だろう

石井洋二郎

Ishii Yojiro
東京大学理事・副学長

聞き手
森山至貴
(社会学者・作曲家)

魂を込めて歌います

森山：せっかくなので少し広げて、芸術全般の話を伺います。先生は文学以外にどのような芸術に触れてこられましたか？

石井：演劇青年だったので、私がいちばんなじんだ芸術というと、演劇かもしれません。自分で演じるということは身体性そのものですよね。本を読むのは座っていても寝ていてもできるけれど、演劇は自分の身体を使って表現しなくてはならない。その快感みたいなものにつかっていた時期がありました。音楽についていえば、私は森山さんのような才能は全くないから、カラオケ専門なんです(笑)。

森山：どのような歌を歌われるのですか？

石井：けっこう幅広く、昔の演歌から Mr.Children ぐらいまでは。

森山：広いですね(笑)。

石井：私の中学高校時代の音楽の先生はリコーダーの名手で、授業でもリコーダーの練習がほとんどでした。それはそれでおもしろかったのですが、歌を歌うということがありませんでした。そのため歌う快感をずっと知らないままで、自信をもって歌うということもありませんでしたが、高校の修学旅行のバスの中でマイクが回ってきて「歌え」と言われてしかたなく森進一か何かを歌ったら、これがウケて。その快感が忘れられず、大学に入ってからカラオケスナックなどに行き、歌うことが好きになりました。自分で言うのもなんですが、歌はね、けっこうイケるなと思っているんですよ(笑)。



○いしい・ようじろう

1951年、東京都生まれ。1975年、東京大学法学部卒業。1978年、パリ第4大学修士課程修了。1980年、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。1980年、東京大学教養学部助手。1982年、京都大学教養部助教授。1987年、東京大学教養学部助教授。1994年、同教授。2007年、東京大学駒場図書館長。2012年、東京大学副学長。2013年、東京大学大学院総合文化研究科長・教養学部長。2015年より東京大学理事・副学長。学術博士。

主要著書

『差異と欲望——ブルデュー「ディスタンクシオン」を読む』(藤原書店、1993)
『ロートレアモン イジドル・デュカス全集』(訳、筑摩書房、2001、日本翻訳出版文化賞・日仏翻訳文学賞)
『ロートレアモン 越境と創造』(筑摩書房、2008、芸術選奨文部科学大臣賞)
『フランス的思考——野生の思考者たちの系譜』(中公新書、2010)
『告白的読書論』(中公文庫、2013)

森山：おーっと！

石井：口先だけでうまく歌うのではなく、魂で歌うというか(笑)。

森山：おお！ カッコいい！

石井：その快感みたいなものがすごく好きです。昔はクラシックも聴いていましたし、今もオペラは観に行ったりはするんですけど、音楽はそれぐらいです。

森山：オペラを観に行って、クラシックも聴いて、カラオケは2日連続で行くぐらい好き…むしろ音楽漬けですよ(笑)。

石井：私はフランスのことを専門としているので、パリに行く機会があるとバステューのオペラ座などにオペラを観に行くのですが、やはり高揚感がありますね。その高揚感が好きなんだろうと思います。

森山：それは演劇がもつ、舞台芸術の高揚感と近いものなのでしょうか？ 例えば絵画を観たときの高揚感とは少し違うというか…。

石井：そうですね。オペラは観ているだけですが、自分も歌手に一体化していると思うことがあります。受け身ではなく、身体を通して能動的に何かを表現する快感のようなものが共有できる、そこが演劇やカラオケと共通しているという気が少しします。

森山：学ぶ、本を読むといったある種の知識に関する修養、積み上げていくことと同時に、身体を使ったり、身体をジャックインしたりしていくことで快感を得ること、そういう2つの要素が先生の中で両輪となっている感じでしょうか？

石井：頭を使うことと、自分の身体を使って何かをする快感の両方がないと、バランスがとれないという気はします。

森山：例えば Mr.Children の歌はどのように覚えられるのですか？

石井：主に YouTube です。歌いたい曲があると YouTube で検索して、何度も聴きながら一緒に歌います。それから私は車を運転するのが好きなので、運転中に流していると自然に覚えてしまう。カラオケのリストは、400曲ぐらいありますよ。

森山：持ち歌リストですか？

石井：そうです(笑)。

森山：先生の琴線に触れるのは、歌詞かメロディーか、それとも両方ですか？

石井：歌詞ということはあまりなくて、メロディーが主体ですが、ただあまり歌詞がひどいと、ちょっと抵抗があって歌えないことがありますね。中島みゆきや井上陽水、さだまさしの曲は歌詞もいいので、とても好きです。



音楽と国語のコラボ

森山：学校の音楽の授業で、何か思い出の曲はありますか？

石井：特に思い出の曲というのはないですね。授業について言うと、学校教育は教科で学ぶ内容が分かれています。教科どうしを関係付けられればもっとおもしろいことができると思います。歌は言葉をメロディーやリズムにのせるわけですから、音楽は国語や英語とかかわりますよね。それから音楽と数学は意外と近いのではないのでしょうか。私は数学のことはあまりよく分かりませんが、リベラルアーツの話に戻すと、音楽は中世のリベラルアーツを構成する「自由七科」の中に入っているのです。しかも芸術ではなくて、算術や幾何や天文学と並んで「数に関する学問」として入っていた。そういうものとして音楽を捉えるのもおもしろいでしょう。また音楽と社会科、歴史との関連では、例えばフランス革命と『ラ・マルセイユーズ』の話もおもしろいと思います。音楽は歴史の節目でいろいろな役割を果たしていますからね。

森山：もっと聞かせていただけますか？

石井：私は文学を研究しているので、特に言葉と音楽は密接に関係していると思います。フランス文学の話になりますが、ヴェルレーヌの詩にフォーレやドビュッシーが曲を付けていますね。ヴェルレーヌは「何よりもまず音楽を！」と、Art poétique (『詩法』) という詩の中で言っています。我々が文学というと、まず小説などを思い浮かべますが、散文が文学の主流になったのはずっと後の話で、もともとは文学といえば韻文、つまり詩だったのです。そして詩は文字で読むものではなく、声に出したり、聴いたり、朗唱したりするもので、要するに音を介して存在しました。ギリシャ悲劇にもコロス (chorus) がいて、音楽とは切っても切れないものでした。それが写本という形で伝えられていったわけですが、活字として普及するようになったのは中世以降のことですから、原点から言うと、言葉と音楽はたいへん深い結び付きをもっています。そこをもっとうまくつなげて教えられるといいのではないかと思います。

森山：例えば国語の先生に聞いてみるということでしょうか？

石井：歌を歌うときに歌詞の意味をどこまで教えていらっしゃるのか私はあまり存じ上げませんが…私が小学生の頃は文語的な歌詞のものが多く、意味も分からずに歌っていた曲がたくさんあったと思います。そういうときにもうちょっと国語と結び付きがあればおもしろいのではないかと…。

森山：今は卒業式ソングや J-POP と呼ばれるものの比重が少しずつ増えていて、いわゆる芸術的な曲と二極化しているように感じます。前者では、一生懸命考えたり教わったりしなくても共感できる歌詞も多いので、言葉の意味や背景を捕まえていくことが難しくなっているのかもしれない。

石井：今は J-POP のようなものも歌うんですね。

森山：高校では DREAMS COME TRUE や松任谷由実、中島

みゆきの『糸』なども入っています。

石井：『糸』はいい歌ですからね！

humanであることの証

森山：とても幅広い言い方ですが、音楽や芸術一般が、人生においてどんな価値をもつのか、どんな意義をもつのか、あらためて先生のお考えを聞かせていただけますか？

石井：芸術がなければ人間ではないと思うぐらい、私は芸術が重要だと思います。それが何の役に立つのかと言われると、決して役に立つわけではありませんが。

森山：最近、文系の学問はいらないといった話がありましたね。

石井：はい。いったん芸術からは離れますが、それについて考えたことがあります。学問には“サイエンス science”とそうでないものがありますね。よく「自然科学」「社会科学」「人文科学」と言いますが、英語でいえば自然科学は“natural science”、社会科



○ もりやま・のりたか

1982年生まれ。東京大学教養学部卒業、同大学院修士課程修了。同博士課程満期退学。日本学術振興会特別研究員 (PD)。東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻助教を経て、早稲田大学文学部専任講師。専門社会調査士。第22回朝日作曲賞受賞。第13・18・20回朝日作曲賞佳作受賞。大学院生時代には東京大学コーロ・ソーノ合唱団の学生ピアニストとして松本望氏の合唱組曲『むすばれるものたち』の初演に携わった。

主要作品

『混声合唱とピアノのための さよなら、ロレンス』(音楽之友社、第22回朝日作曲賞受賞)

混声合唱組曲『蝶 はばたく朝』(教育芸術社)

『女声合唱とピアノのための おてんきのうた?』(Miela Harmonija)

混声合唱組曲『太陽と海と季節が』(BRAIN MUSIC)



学は“social science”、しかし人文科学は“humanities”で、scienceという言葉は用いない。“human science”という言い方もありますが、これは人間そのものを対象とした心理学や教育学といった学問を指す概念で、“humanities”とは違います。つまり“humanities”だけは自然科学や社会科学と概念レベルが違っているので、「人文科学」というより「人文学」と言うべきだと思うのです。そしてこれは“science”の基層にある、人間が人間であるために必要なものであって、“science”はその上に成り立っているものではないでしょうか。よく「哲学は諸学の学」と言いますが、哲学に代表される“humanities”はあらゆる学問のメタレベルの学問であって、最終的には「人間が人間であることの意味は何なのか」ということにつながります。“science”は実証可能なことをとことん追求する性格をもちますが、反対に“humanities”は実証可能ではないものをすくい上げる性格をもっていると思うのです。

ある経済学者の友人から、「経済主体は最適化を図る」という話を聞いたことがあります。企業であれば「最大の利益を出すにはどうしたらよいか」、個人であれば「最大の幸福を得るにはどうしたらよいか」を考え、最適化を図るというのですが…少なくとも個人については、「いや、そんなことはない」と私は思うのですね。人間というのは「こんなことをすると不幸になるかもしれない」と分かっているにあえてばかなことをしてしまったり、「こんなことをしてはいけない」と思っているのに禁止を犯してしまったりする愚かな存在だからです。その愚かさが人間の人間たるゆえんであり、そうした説明のつかない不条理な人間を対象としているのが“humanities”です。

そしてその中に芸術もあると思います。ですから芸術が呼び起こす感動のようなものは、実証できるものではないし、たぶん説明できるものでもない。理論的に説明できる側面はもちろんあるけれど、最終的に「ここから先はやっぱり説明がつかない」というところが絶対にあるはずで、それが“humanities”だと私は思っています。

先ほどノーベル賞の梶田先生のお話をしましたが、梶田先生の関心は「宇宙はどうなっているのか知りたい」「いったい宇宙はいつどうやってできたのか」「無限というのはどうなっているのか」という純粋な好奇心から発していました。「分からないから知りたい!」という感情は、とても human なものです。その意味では理科系の学問の基層にも“humanities”があるのではないのでしょうか。humanであるかぎり、それは属性のようなものだと思っ

ています。
森山：“science”が積み上がっていく基層に“humanities”があって、そこに芸術が含まれているとすれば、大学でスペシャライズされるもっと前の小・中学校の段階で、例えば音楽や絵画などの“humanities”に触れることが、スペシャライゼーションをほんとうに根本的なところで支える、とても重要な営みなのですね。

石井：おっしゃるとおりです。やはり小さい頃に芸術に触れることはとても大事ですし、“humanities”が忘れられた状態で“science”ばかりが専門化・細分化していくのは決していいことではありません。先ほどお話しした「最適化」についていえば、人工知能は最適化を図るという点では人間をはるかに超えています。しかし人工知能は、はたして愚かになれるのでしょうか。私は人工知能については全くの素人ですが、愚かになれるのは人間だけなのではないでしょうか。愚かであったり、わけもなく感動したり、泣いたり怒ったり…これは human であることの証であり、芸術の根本にあることだと思うのです。そこから切り離された“science”がいきすぎてしまうのは危険だと思います。もう一度“humanities”の重要性を見直すべきではないでしょうか。

森山：芸術がそこにあってもいいのだという確信…。

石井：「あってもいい」というより、「なければならぬ」(笑)。

森山：そうですね。受験勉強をしている子どもたちは、音楽や美術、体育はどうでもいいとなりがちですが、それがあることの喜びを大人がどれだけ確信しているかが大事だと思いました。

石井：大人が感動しているところを見せないと、おそらく子どもも感動できないと思います。教育というのは、面と向かって教えることも大事ですが、背中を見せることも大事です。大人がおもしろいと思っていないことを教えても、子どもはおもしろいとは思わない。教師がほんとうに感動しているところを見せないと、若い学生はついてこない。やはり大人が“humanities”を見せることも大事だと。

おもしろい！ と思っている背中

森山：子どもに背中を見せる大人の役割について、先生方に向けてひと言いただけますか？

石井：偉そうなことを言える立場ではありませんが、私が中学高校時代の音楽の先生をいい先生だと思った理由は、その先生がリコーダーを演奏しているときにほんとうに魅力的だったからです。けれども「音楽を教える」「音楽を教わる」立場で向き合った瞬間に、どうしても学校という空間の中で「成績をつけるもの」「成績をつけられるもの」になってしまう。これはあらゆる教科に言えることで、「教える、評価する」「教わる、評価される」という一方的な関係性が、とても大切なことを失わせているような気がします。普通の教科と音楽とではまた違うと思いますが、教師が音楽を楽しんでいるところを見せるのがまず第一ではないでしょうか。音楽はこれだけ高揚感がありおもしろくて楽しいものだということを見せれば、子どもも「なるほど」と実感するはずです。教えるべきことは教えなければいけないけれど、楽しいと思っていなければ子どもはついてこないんじゃないかな…我が身を反省してそう思います。

森山：教師がおもしろがっている姿を見て、子どもが「おもしろいのかも」と思ったら万々歳という気持ちをはくせませんね。

石井：「先生がこれだけ楽しそうなのだから、おもしろいのかも」しれないと思うでしょうし、その対象は先生と同じものでなくてもいいわけです。自分はこれがおもしろいんだという姿をいろいろな大人が見せることで、その子は自分のいちばんおもしろいものが何なのか分かってくる。どうしても成績や評価にしばられてしまうのは学校の宿命ですが…先生もかわいそうですね。我々だって大学で教えていて、「成績なんてつけない」と思いながらやっているわけですよ。ほんとうは、自分が学問に打ち込んでいて「ああ、おもしろい！」と思っているところを学生に見てほしい。時間を忘れて文献に読みふけっている姿を見てほしい。そういうことではないでしょうか。

森山：私自身の大学教師としての姿勢を顧みるすてきな言葉をいただきました。子どもたちにもひと言いただけますか？

石井：何でもいいから、若いうちにいろいろな本を読んでほしいです。おもしろくろうがつまらなろうが、本は読んだほうがいい。つまらないと思ったら途中でやめればいいんです。最後まで読まなくてはいけないなんてことは全然ない。でも読まないよりは読んだほうがいい。他の学科も同じですが、義務感でさせると子どもは嫌いになってしまう。だから先生方も見返りを求めないで、ただ「読むだけでいいんだよ」と言ってあげてください。

森山：ありがとうございました。



インタビューを終えて 森山至貴

インタビューを終え、「大人自身が楽しむ姿を若者たちにどう見せていくのか」という重要かつ根源的な問いを石井先生から手渡されたな、と痛感しました。大学教師として学生に知を伝達し、また作曲家として音楽の喜びを演奏者や聴衆と共有する私にとって、この問いとの格闘はとても長く続くことになりそうです。読者のみなさんにも、ご自身のこれからの音楽活動のヒントを石井先生のお話から見つけていただければ幸いです。

それにしても演歌ありJ-POPありの「持ち歌リスト」には驚きました。いつか石井先生の美声をお聞きたいものです。石井先生、本当にありがとうございました。

Information



石井洋二郎
告白的読書論

中央公論新社

定価(本体743円+消費税)
2013年

人はなぜ本を読むのか。読書の欲
びを心底味わえるのは思春期だけ
なのか。何を、いつ、どう読んだか
を綴る、赤裸な読書体験記。

授業者に訊く——1

今回の「授業者に訊く」では、高等学校での実践を2校ご紹介します。

1校目の訪問地は愛知県北西部、名古屋からほど近い一宮市です。楽典、歌唱、器楽とテンポよく進む授業を通して、生徒たちの意欲的な学習態度が印象に残りました。

授業者：大塚 豊（愛知県立一宮興道高等学校）



1年生全員が音楽を履修している！

Vent (以下V): とてもまじめで、お行儀のよい生徒さんたちですね。



〇おおつか・ゆたか
愛知県立一宮興道高等学校教諭

大塚: 授業を参観された方からよくそう言っていますが、今日は特に意識していたかもしれません。創意工夫というより、与えられたことをきちんとこなすタイプが多いように思います。

V: 潜在能力がとても高そうな印象を受けました。

大塚: できるだけ生徒に自信をもってこの先伸びていく力を付けてもらいたいと願っ

て指導しています。いろいろなことができるようになると、自信につながりますから。特に本校では、1年生全員が芸術科として音楽を履修するので、必ずしも音楽が得意な意欲のある生徒ばかりではありません。ですから、なるべくいろいろな項目を用意して少しでも得意なものが見つけれられるよう、意識して指導しています。

V: 生徒さんの自信につなげたいということですね。

大塚: 歌が得意な生徒もいれば、ギターがよく弾ける生徒もいます。中には理論的なことに興味をもち、創作に意欲的な生徒もいます。できるだけいろいろな分野を経験させたいのです。

楽典や読譜を学ぶ大切さ

V: 本日の授業ですが、まず授業前に先生が黒板に書かれた2音間の音程を答える問題を、音楽室に入ってきた生徒さんが解いていました。これは常時活動なのでしょうが？

大塚: そうです。既習事項の復習として楽典やソルフェージュ的なことを毎回扱います。

V: ずいぶん高度な内容だと感じましたが、1年生の最初から始めれば、このレベルの課題もこなせるようになるのですか？

大塚: 中学校で楽典的なことに触れないまま入学してくる生徒や、合唱コンクールなどで歌は歌っているものの、そこでつまずいてしまい音楽が嫌いになっている生徒もいます。ですから一度リセットしてト音記号、ヘ音記号からあらためて始めようと思いました。1学期末に筆記試験で楽典の問題を出しますが、この時点で全ての生徒が理解しているという実感はあります。

V: すごいですね。



イラストレーション：ソリマチアキラ

豊富な学習内容で授業を構成し、音楽する力を育てる

聞き手：ヴァン編集部

大塚：ト音記号はまだいいのですが、ヘ音記号はほとんど読めません。でも男子生徒は合唱で使いますから、正しく理解させたいと思っています。楽譜の概念を順序立てて整理して学べば、生徒はきちんと理解します。

V：楽典の内容として、音程の次は何を学ぶのですか？

大塚：コード(和音)です。吹奏楽部の生徒たちは受け持つ楽器によって移調が重要な問題ですし、コードから学ぶと理解も早いですね。

V：なるほど。

大塚：音程を学ぶ利点は、実際に歌うときに「ここは、完全四度だよ」という概念を生かせることです。耳コピーだけで歌うといつまでたっても音程が悪くなりがちで、限界があります。長二度と短二度の違いが分かるだけでも、広い狭いという指導ができるので効果的です。

V：教えたことを実際にしっかりと表現で活用しているということですね。

大塚：1学期にドレミの読みから音価までを学習するので、夏休みの宿題には「リコーダーで8小節の曲をつくる」という課題を出し、9月の最初に発表させます。ここでは記譜した作品の提出と、自分の曲をどれぐらい練習したかの2つを評価します。皆いい曲をつくってきますし、小節の反復や終止についても教えるので、実際にそれを使って8小節以上の曲にしてくる生徒もいます。

V：リズム聴音は先生がピアノで単音を弾いて聴き取らせていましたが、みんなよく記譜できていますね。

大塚：楽譜を読めないままなのは悲しいで



すよね。国語の教科書を開けば日本語を読めるし、英語も読むことができる。そんなふうに考えると、音楽では書いてある楽譜を実は読めないというのは問題だと思います。簡単な楽譜なら読めるということが目標です。あとは歌う、ギターを弾くといった手段で活用できればいい。そのためには最低限、今日学習したリズムを理解することが必要です。

V：読譜指導で特に気を付けていらっしゃることは何でしょう？

大塚：問題なのは、思わぬところで生徒がつまずいてしまうことです。例えば、連鉤で結ばれているだけでも疑問に思うようなので、そこをきちんと説明します。教科書で詳細な説明のないところは補足します。

毎時間、なにか歌う

V：続いてシューベルトの『野ばら』の学習に移りました。指導用CDの朗読音源を

活用されていましたが、本時が最初の扱いですか？

大塚：そうです。別の曲をイタリア語で歌ったときもそうですが、まず原語で歌詞を読むことから始めます。今回のドイツ語では、語尾の重なりを簡単に説明して、朗読の音源を聴いてまねさせました。ウムラウトは生徒がおもしろがりますね。私は「お経読み」と言っていますが、リズムだけ曲に合わせて声に出します。

V：朗読し、演奏を鑑賞し、実際に歌ってみるという活動が短時間のうちに無駄なく行われていました。『野ばら』は何時間ぐらいかけますか？

大塚：評価の素材がすでにありますから、『野ばら』は歌うだけですが、ゲーテとシューベルトという偉大な2人については教養の面でも知っておいてほしいし、取り上げるべき作品だと思います。ヴェルナーの作品も歌います。

V：歌唱については年間を通してどのよう



に扱われていますか？

大塚：毎回の授業では必ず何かしらの曲を歌います。ただ、評価として取り上げるのは1学期で、2学期は器楽がメインになります。

和楽器では五線譜を使わない

V：『野ばら』の次は篠笛でした。

大塚：篠笛は「夏休みのうちにとにかく音を出してみなさい」という宿題を与えています。9月の最初に、先ほどのリコーダーで作曲した宿題を扱ったあと、すぐに切り替えて篠笛に移ります。

V：リコーダーはそこだけなんですね。

大塚：自分でつくった曲を音にしたい、と生徒は思うので、リコーダーはその点でとても現実的です。歌で表現するとなると指導も必要です。篠笛の学習は、9月に文化祭があった関係で、正味1か月半ほど吹いてきたところです。

V：生徒さんたちはたいへん熱心に『ひらいた ひらいた』を練習していました。読譜についての学習をあれだけしながら、篠笛では数字譜を使うのですね。

大塚：生徒には「今まで使ってきた楽譜と日本の篠笛の楽譜は違うよ」と説明するところから始めます。日本音楽を経験する意味は、そこではないでしょうか。

V：鑑賞なども関連させて指導されますか？

大塚：もちろんです。愛知県には篠笛に関するDVD付きの指導書があり、演奏家による実演を鑑賞するなど、導入時に活用しています。

V：器楽で扱うのはリコーダーと篠笛だけですか？

大塚：このあと、ギターを学習します。楽典でコードを扱うので、それともリンクします。

V：それはすばらしいですね。ギターは生徒さんに人気があるでしょうね。

大塚：特に男子は好きです。中学校ではあまり経験していないようなので、みんなが

同じスタートラインから取り組めるのもいいところです。

基礎・基本を大切にしながら育てる、生徒の学習意欲

V：授業の最後には、本時で学習したリズム聴音と篠笛について希望した生徒さんに小テストのようなことをしていました。そのやり取りを拝見して個別指導のきめ細かさも感じました。

大塚：誰かが落ちこぼれた状態になって「ちょっとついていけない」という雰囲気になると、歌うことや楽器を演奏するといった活動にも影響が出てしまいます。生徒とコミュニケーションをとって、学習や習熟の度合いを個別に確かめるのは、できるだけそうならないようにするためです。

V：小テストを積極的に受ける生徒さんが





多くて驚きました。

大塚: 本校では国数英については火水金に基礎学力テストとして、決まって10分間の小テストを行います。そんなこともあり、音楽でも、一項目を教えたら授業に影響がない程度に小テストを実施しています。リズム聴音はくじ引きのように4つの問題の中から1つを選ぶので、覚えて練習することはできません。篠笛はハンコ制です。ハンコを押す欄は10個あり、それが評価にもつながります。

V: 小テストを受ける生徒さんの数は毎回決まっているのでしょうか？

大塚: 今日は、授業時間の5分前に内容を終えることができました。ときには10分前に終了することもあり、その時間をみて生徒たちが各自で判断して小テストを受けたり、練習の時間にあてたりと調整しているようです。

V: 授業開始前に黒板に書かれていた2音間の音程を答える課題もそうでしたが、生徒さんを積極的に取り組ませる工夫などがあるのでしょうか？

大塚: 前任校では、授業に遅れて来る生徒がいました。休み時間に課題を出すと、簡単な問題をやりたいのでみんな教室に早く来るようになりました。間違えて授業中に指摘されるのがイヤ、というのもあるかもしれません。また、前時の復習を時間中にしたくないという理由もあります。時間を有効活用し、生徒たちは習ったことの確認に当てられるし、私は授業を効率よく進められるということがうまく浸透してきているかもしれません。

V: 充実した授業内容と、積極的な生徒さんに感動を覚えた1時間でした。

大塚: 生徒からは「どうして先生の授業は内容が濃いのですか？ 他の学校の友達にもっとたくさん合唱曲を歌っているのに」と言われたことがあります。「じゃあ、これからは合唱の授業ばかりにする？」と聞いたところ「いいえ。こういう勉強もいいと思います」と返ってきました。意欲と理解力のある生徒たちに助けられています。

V: 頼もしい生徒さんたちですね。本日はありがとうございました。

授業の流れ

	項目	内容
導入	○ 問題(2音間の音程)の答え合わせ ○ リズム聴音	・ 授業前にあらかじめ黒板に書いておいた問題を、教室に来た生徒が自由に解く。 ・ ピアノの単音によるリズム打ちを数回聴いて記譜する(4問)。 ・ 指名された生徒が代表して黒板に書く。
展開	○ シューベルトの『野ばら』を歌う ○ 篠笛を吹く	・ 発声練習として校歌を歌う。 ・ ドイツ語の朗読音源に合わせて音読する。 ・ ウムラウトや子音の重なる発音を練習する。 ・ 何度か歌う。 ・ CDを鑑賞する。 ・ ヴェルナーの作品を鑑賞する。 ・ 『ひらいた ひらいた』を数字譜で練習する。
まとめ	○ 小テスト	・ 希望した生徒が、本時の学習内容のリズム聴音か篠笛について教師と一対一で確認する。



水井俊之 先生
愛知県立一宮興道高等学校校長

授業者に訊く——2

しとしとと肌寒い秋の雨が降る中、鹿児島県鹿児島市を訪ねました。1年生の選択授業2時間は、手遊びあり、男子のソロパートありの合唱から始まりました。生き生きと音を楽しみ味わう様子をお届けします。

授業者：盛山春樹（鹿児島県立武岡台高等学校）



音楽のスイッチを押す

Vent (以下V)：生徒たちがピアノの周りに集まって和気あいあいと先生の伴奏で歌ったり、楽しそうにギターを弾いたりしている様子が印象的でした。何か意識していらっしゃることはありますか？

盛山：最初にこの『つどい』*を使うことです。いろいろな悩みを抱えている生徒もあるだろうし、テストで低い点数を取って暗くなっていたりする生徒もいるかもしれない。この歌集はしっかり歌うことを目的と

しているのではなく、授業に来たらまず歌って音楽のスイッチを押そうという理念なんです。

V：特に発声練習せずに歌っていました。今日はギターの授業ですが、歌唱の授業のときは、『つどい』のあとに発声練習をなさるのですか？

盛山：歌唱のときには『つどい』は使いません。音楽室に来たらまず体操や発声練習などをして、日本歌曲やドイツ歌曲、イタリア歌曲を歌います。

楽しみながら学ぶ

盛山：『つどい』のテーマに「たくさんの歌を知ろう」というものがありまして、一度歌ったらもう次回は歌わないという決まりにしています。ですから、曲の横には何月何日に歌ったと書きます。そうすると、もうこの曲は歌えない。

V：毎回初見で歌っているということですか？

盛山：はい。だいたいが知っている曲だということもありますが、取り上げる曲を知らない生徒が多いときには、反復しながら歌います。『卒業写真』がそんな感じでしたね。小学校や幼稚園で習ったことのある曲や民謡なども入っているので、広く歌を知ることができます。

V：歌いながら、先生が間奏のところで曲について一言説明を入れたり、発声についてのアドバイスをしたりするのを見て、楽しみながらも無意識のうちに指導が行き届いているのだなあと感動しました。

盛山：ありがとうございます。松任谷由実の話で「おっ！」と生徒の気を惹き付けたり、クリスマスの曲は英語で歌ってみようかと提案したり。いろいろな曲を積み重ね



音楽を通して自分を表現する

聞き手：ヴァン編集部

ることで、リピートなどの記号にも自分たちで気付くことができる…そういう時間になればと思っています。

V:「楽典」として学ぶよりも、実際に歌いながら覚えていくのですね。

盛山: また、『つどい』の楽譜に書かれているコードを見て根音を言わせることもあります。『このぼり』の冒頭はずっとCですが、その1拍目に「D」と言わせる…ゲーム感覚です。

V: 楽しいですね。「当たった!」とか「あっ、違った!」とか。

盛山: 「フルコンボを目指してやってくれ」とか言ってます(笑)。

V: いろいろな仕掛けがありますね。今日は『つどい』で20分ぐらい時間を使われていたので、常時活動としては長くて驚きましたが、利用しない手はありませんね。

盛山: 「ピアノの周囲50cm以内に入りなさい」とみんなを集めて、わいわい言いながらするのが楽しいんです。きれいな声で歌うとか、大きな声を出すこととは違いますが、みんなで歌うということの意味もそこにあるような気がしています。



男子はタブ譜、女子は五線譜のほうが読みやすい

V: 今日のギターの授業は何時間目になりますか?

盛山: 6時間目です。

V: 6時間目でここまで弾けるようになるのですね!? 次週のテストと『夢の中へ』を終えれば、ギター終了…。

盛山: そうですね、ギターの学習はだいたい8~9時間ぐらいの扱いです。集中して取り組みます。

V: 生徒さんたちの読譜力についてはいかがですか? プリントは五線譜とタブ譜を併記したものを使っていらっしゃいました。

盛山: 男子はタブ譜のほうが読みやすいようです。女子は割に五線譜を読めるので、ギターの音階を覚えたら五線譜のほうが見やすいという生徒もいます。しかしギターの学習なので、タブ譜を読めるようになってほしいと思っています。読譜力はやはり男女差が大きくて、本格的ではないけれど片手だったら初見でもピアノを弾ける女子生徒は多いようです。ただ男子は…特に今日のクラスは男女差が激しくて。男子は置き去りになってしまうので、ギターは男女混合のグループ分けにしました。

V: 男子7人、女子12人のクラスで、全グループうまく男女が交ざっていました。男子だけだとふざけてしまうからではなく、純粋にその差を埋めるための工夫だったのですね。

盛山: はい。休み時間もずっとギターを弾いているような真面目な生徒が多いので、ほったらかしにしても遊んでしまうことはほとんどありません。



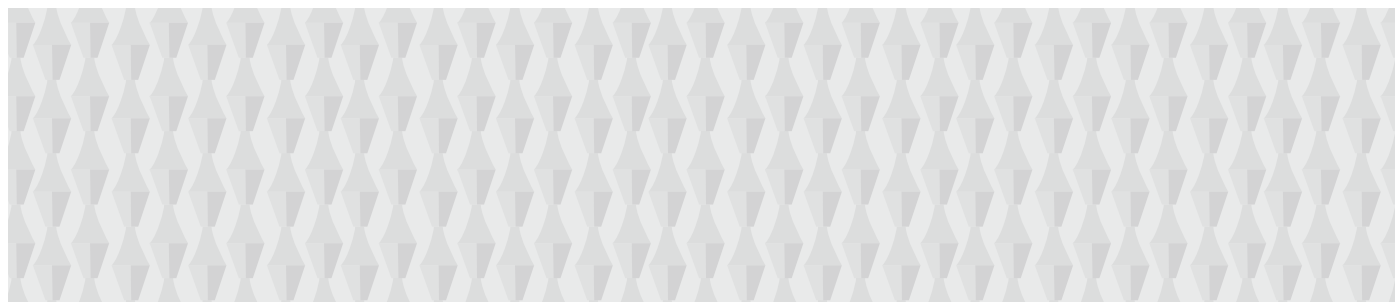
○もりやま・はるき
鹿児島県立武岡台高等学校教諭

V: すごいですね。2時間授業が続くと、どうしてもだらけてしまう瞬間がありそうですが…。

盛山: そういう面では、生徒に相当助けられています。学校全体の雰囲気がよくて、先生も生徒も一緒に活動しているという校風です。本校では、世界といろいろな交流ができ、さまざまな文化に共感できる、「共に生きる」ことのできる生徒の育成を目指しています。音楽室にも貼ってありますが「共に奏でん」など、よく「共に」という表現を使います。

V: それが授業の雰囲気にも表れているのですね。個人練習では、男子どうして教え合う様子も見られました。男子のやる気を引き出すコツはありますか?

盛山: それは萎縮させないようにクラスに男子がたくさんいることだと思います。1年生の芸術選択を決める時点で、こちらからクラス編成の希望を出しておきます。「女子クラスを2つつくってください」とお願いすると、それ以外のクラスにはおのずと男子が集まります。



音が取れない生徒にも、がんばったかいがあると思わせる

V: 生徒さんたちが音楽の授業でいちばん得意なのは何ですか？

盛山: やっぱり歌です。自分の授業について、1年間を振り返って何がいちばんよかったか、どういったものを授業で続けてほしいかなどのアンケートを取ると、ダントツで『つどい』の時間がよかったという回答が多いんです。

V: 年間では、やはり歌の時間が多いのですか？

盛山: 1学期は発声などを含めて歌曲を中心に扱い、独唱までできるように活動します。そして2学期のメインはギター、3学期は箏の学習ですから、どちらかというと器楽が多いのかもしれません。

V: 逆にここは難しいと感じていらっしゃることはありますか？

盛山: やはり、楽譜を読むのが苦手な生徒を、楽しんでいる周りの生徒とどのようになじませていくかということです。1学期の



歌唱の授業では、みんなの前で独唱をするんです。大きな目標としては、音楽を通して自分を表現するということですが…音程がうまく取れない生徒にも、そのまま歌わせます。それがほんとうによいことかどうかは、僕自身もまだ答えを出せていないのですが…。恥をかくことになるかもとか、いじめられるようなことがあるかもといった心

配もあります。でも「音程の取れない生徒もいるんだ」という認識をもったり、そういうときに周りがどういう行動をとればよいのかという学びにつながればいいと思います。…とは言うものの、音の取れない生徒にがんばってよかったなと思わせるのは難しいかなあと思っています。

V: どういったフォローをなさいますか？ クスクス笑いが起きてしまうこともあるかと思っています。

盛山: ありますね。そこは最後の講評で、「全体としてはこうだったね。彼も一生懸命やって最後まで歌いきったことはすばらしかったよね」などと言うようにしています。音の取れない生徒には「最初はこうだったけれど、ここがよかったよ」と伸びたことを評価する。よかった点を取り上げることで、がんばったかいがあると思ってくれると信じています。





響きを大切に、渾身の1音で

V: 『河は呼んでいる』を教材として選ばれた理由は何でしょうか？

盛山: 単純に教科書に載っていたからです。今年初めて扱いました。

V: 『夢の中へ』は定番曲ですが…。

盛山: コードの種類が少ないということ、G-durだから扱いやすいかなと思ひまして。

V: 最近FだけではなくGも押さえにくいと聞きますが、実際にはいかがですか？

盛山: Gは押さえにくいようです。指が開かないのか、手首が固まってしまっているからなのか…Cも大変で。ですから「指を替えていいよ」「角度を変えてみたら」などと一つ一つ指導しています。

V: ストロークの練習を聴いていると、押さえやすいコードのときには如実に音が大きく、きれいでしたね。

盛山: それもいいですね。「このコードきれい！」って思ってくれたらいいな。

V: 先生は授業中に何度も「響きを大切に」とおっしゃっていました。響きを大切にすることは、授業の中でどういう位置付けになるのでしょうか？

盛山: 僕の授業は、どちらかというと技術面に重きを置いていると思っているので、生徒も「上手になりたい」とか「テストでいい点数を取るためにはこれをクリアしないとイケない」という意識になりがちです。ですから、音を味わうことやギター本来の響きに注目させたいというか。たった1音だけを鳴らすときにも、味わえるものがあると思います。

V: シーンとなるまで、しっかりと最後の余韻まで聴くことや、きちんと静かな状態か

ら音を鳴らすという習慣は、集中力の面からしてもたいへんよい活動だと思いました。状態が整わないまま音を出してしまうと、そういう音楽になってしまうと思いますので。

盛山: 2クラス合同で30人ぐらいのクラスでも「渾身の1音で」と言う音がそろいます。例えば違う弦を触ってしまうと目立ってしまうので、「きちんと出よう」「ちゃんと聴こう」とする気持ちが生まれ、合わせることに繋がります。おもしろいですよ。ギターや箏だからこそ味わえることです。

V: そうですね。今日はほんとうにありがとうございました！

授業の流れ

	項目	内容
導入	○ 『高校生の歌集 つどい』を歌う ○ 校歌を歌う	・ 生徒が選んだ曲を6曲歌う。『卒業写真』『アルプス一万尺』『上を向いて歩こう』『ハナミズキ』『ジングルベル』『汽車ポッポ』
展開	○ ギターを弾く	・ 全員でチューニングを行い、音階や奏法を練習する。 ・ 『河は呼んでいる』を練習する。 ・ グループに分かれて練習する。 ・ 『夢の中へ』を練習する。
まとめ	○ 次時の予告	・ 次週のテストに向けて『河は呼んでいる』を通して弾く。



本村誠人 先生
鹿児島県立武岡台高等学校校長

これからの学び①

～学力向上とアクティブ・ラーニング

特集

新しい時代に必要となる資質・能力の育成が求められる今、ヴァンでは2つのキーワードを探るべく秋田県と佐賀県を訪ねました。

今回の特集では、文部科学省の全国学力・学習状況調査(学力テスト)で最上位県である秋田県の中でもトップクラスの成績を維持する同県東成瀬村における実践と、音楽科においてアクティブ・ラーニングをどう捉えるかについて、取材をもとにお伝えします。

●●東成瀬村での実践から学力を見つめ直す

少子高齢化の進む秋田県の東成瀬村は、高い学力を誇る村として有名です。今回その教育現場を取材させていただきました。

東成瀬小学校の5校時を訪ね、全てのクラスを参観しました。そこには自然豊かな環境の中でともに学び合って育つ子どもたちと、豊かな人間性を育もうという思いで子どもたちと向き合う先生方の姿がありました。

学年	教科	単元・題材
1	国語	ともだちに、きいてみよう
2	音楽	ようすを おもいうかべよう『小ぎつね』
3	道徳	おばちゃん、がんばれ
4	国語	ごんぎつね
5	体育	器械運動
6	総合学習	「わたしたちのくらしと税金」
やまゆり (特別支援)	国語	短い文(カルタ)

学び合って育つ子どもたち

まず、どの授業でも子どもたちの発言が全て「根拠をもって」なされていたことに驚きました。東成瀬村では、小学校1年生の段階から「つたえ合いのスキル」を身に付けることが徹底されています。発言中、言葉につまってしまう子がいても、皆じっと発言者を見て次の言葉を待ちます。友達の意見にしっかりと耳を傾け、「ハンドサイン」やうなずきなどで反応する姿は、まるで大学のゼミのようでした。



自分の意見を伝えること、そして他者の意見を受け止め理解しようとするのが、学校生活の中で一貫して行われています。廊下には子どもどうしの学び合いを促す試みの一つとして、作文やノート、作

品などが掲示されており、友達どうしでノートを見せ合ったり、コメントし合ったりしながら、子どもたち自身が互いに学び合っています。こうしたコメントは、同学年の友達だけでなく上級生からも寄せられていて、双方向での刺激になっていると思われました。また、基礎基本の定着の時間として設けられた朝の読書タイム、ドリル学習、休み時間を利用した運動、それら一つ一つの活動がまさに学力の定着に結び付いていると感じました。



現在、東成瀬村には小学校、中学校とも1校ずつしかありません。つまり中学校3年生までクラス替えもなく、同じ仲間と過ごすことになります。このためコミュニティは濃密で、ともするとあまり会話がなくても生活できてしまいます。しかし、それでは表現力が育たないことから、村の教育方針として子どもどうしの学び合いや異年齢との触れ合いを重要視し、多様な価値観や自分とは異なる他者に触れる、つまり「異質性」に触れることが大切にされています。

何よりもまず授業

学力向上についてうかがうと、「これをやれば100点を取れるとか、平均点が上がるなどと考えてはいけません。そんなにうまい話はありません。学力向上のためには何といっても基本は授業です」と鶴飼教育長。質の高い授業を実現するべく、村全体で取り組んでいるのです。

東成瀬村の教員は、毎年ほぼ3分の1が入れ替わります。その中でどのように「村の教育」を維持しているのか。答えは職員研修です。とにかく授業力を高め、長年研究してきた指導法を覚えてもらうため、厳しい研修会が行われています。

さらに教職員は全員、校種や教科の枠を超えて、年に二度、小・中合同で授業研究会を行います。中学校の国語の先生や音楽の先生も小学校の算数の研究授業に参加し、研究協議を行います。その際、指導案の検討や本番前の模擬授業についても皆で検討し、アイデアを出し合うそうです。授業構想の段階から秋田大学の阿部昇教授の指導も入ります。その他、決められた期間内であれば、先生方は互いに授業を自由に参観できるようになっています。このように、教師側にも学ぶ場が準備されているのです。

一方で、意外にも「特別な年間指導計画やカリキュラムはあまり準備しなくてもいい。目の前の授業にエネルギーを使ってほしい」と鶴飼教育長は語ります。授業準備、提出物の評価、校内外のさまざまな「しかけ」など、教師の負担は決して小さくありませんが、地域の方々の力も借りながら東成瀬村の教育は成り立っているのです。

授業の構成

東成瀬村の授業はいわゆる「探究型」で、その骨格は「課題(めあて)」「自分の考え」「学び合い」「まとめ」「ふり返り」から構成されます。低学年では教師側から「めあて」を提示することもあります。こうした授業実践を繰り返すうち、だんだんと自分たちで「課題」を見つけることができるようになります。



○東成瀬村教育委員会
教育長 鶴飼 孝 先生

この授業構成は音楽に関しても同じで、他の教科と同様「めあて」があり、活動の中で子どもたちは「自分の考え」を友達とやり取りする言語活動を通して学び合った後、「まとめ」「ふり返り」を行います。

実際にこの日音楽の授業を担当していた廣瀬先生は算数にご専門の学級担任ですが、授業構成は算数と変わらないとおっしゃっていました。

また、毎朝「今月の歌」を歌うところから学校生活がスタートすること。5・6年生の音楽や外国語の授業では、週に一度もしくは月に一度、中学校の先生が授業を行い、専門性の高い授業が展開されること(学級担任はTTで参加)。図工でも研究主任がTTで授業に入ることなど、子どもたちが表現活動について恵まれた環境で学んでいることがうかがえます。



音楽の「学力」とは

取材の最後に、「音楽の学力とは何だと思われませんか?」と伺うと、「鑑賞する力。率直に表現できること。音楽の知識を身に付け、読譜力が付くこと」(鶴飼教育長)、「音を通して自分を出せること。友達と響き合えること。いいなあ、美しいなあと感じ取る心が芽生えること」(近藤校長)という回答をいただきました。

当初「学力」に焦点を当てるということは、主要教科ではない音楽の場合、議論の中心から外れてしまうのではないかという心配もありましたが、それは全くの杞憂でした。「芸術教科だから」「音楽だから」と「学力」の問題に対して一線を引いてしまうのではなく、むしろ自分を「表現する」という意味において、音楽科で育むことのできる学力があることを再確認しました。



○東成瀬村立東成瀬小学校
校長 近藤幸一 先生

●●音楽科にとってのアクティブ・ラーニング

新しい教育の課題として見聞きすることの多い「アクティブ・ラーニング」。

子どもたちが「どのように学ぶか」を問い直される今、音楽科ではアクティブ・ラーニングをどのように捉え、実践していけばよいのでしょうか？

特集の後半は「音楽科の先生のためのアクティブ・ラーニング・ガイド」を目指し、佐賀県教育センターの副島和久先生にお話を伺いました。次号にも続く内容としてお届けします。

「アクティブ・ラーニング」 基礎知識

Q. そもそも
アクティブ・ラーニングとは？

講義を受けるだけの高等学校や大学の授業スタイルに対して、学ぶ側を能動的に学習に参加させようという考えから提唱された教授・学習法の総称です。それが2014年の「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」(諮問)において、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」という文脈で用いられたことに端を発し、小・中学校にも位置付けられました。

Q. 音楽科では、どのような指導を目指せばよいのでしょうか？

これまでも音楽科においては、「言語活動を通して、思考力・判断力・表現力を高める」という指導が行われてきました。そこで、まず今、実践していることを大事にしてほしい、という点を強調したいと思い



○そえじま・かずひさ
佐賀県教育センター研究課 課長

ます。「アクティブ・ラーニング」と聞いて、熱心に指導している先生ほど「何をしなければならないのだろう？」と悩む傾向があるようです。「〇〇をすればアクティブ・ラーニングだ」といったような型があるわけではありませんし、この言葉に踊らされすぎてはいけません。

Q. アクティブ・ラーニングについて現場の先生方にお伝えしたいことは？

音楽という教科自体、みんなで合唱をつくり上げる、グループで活動するなど「主体的・協働的な学び」がしやすい点は再確認してほしいところです。一方で、これからの授業に関して、願わくは「質的な改善をしましょう」という課題を提示したいと思います。——グループ活動をしたから、子どもたちが話し合ったから、みんなで楽しく活動したからといって、アクティブ・ラーニングとなりうるわけではありません。

授業の質的な改善とは？

小学校

「楽しい授業」を重視する傾向がよくみられます。もちろんそれは大事なことです。この授業で子どもにどんな力を身に付けさせたいのか、技能なのか、創意工夫する思考力なのか、そうした「ねらい」があるかどうかが大きいと思います。「ねらい」は明確か、なぜこの活動をするのかといったところを再度、点検してみてください。それから教科書の内容もきちんと先生が咀嚼し、子どもの実態に即して題材を設定し、教材を選択することも必要だと思います。

中学校

ともすると教師主導の授業になりがちではないでしょうか。中学校は専科制ですし、教え上手で話題も豊富な先生方がたくさんいらっしゃいます。中学校の先生方に私が提言したいのは、「学ばせ上手」な先生になってほしいということです。子どもが自ら学べるように仕向けるような指導の工夫がもっとあってもよいのではないのでしょうか。音楽科での学びが、生活や社会においても生かされるようになれば、素晴らしいことです。

小・中学校ともにいえるのは、「ねらい」を明確にした授業と子どもが自ら考え、活動する場の設定が大切だということです。

アクティブ・ラーニングにつなげる学習活動を考える際のポイントを3つ挙げます。

モチベーション	子どもにその活動をする必然性やその活動をしたいという意欲はあるか。教師は必然性をもたせ、意欲を喚起しているか。
スキル	子どもは活動のやり方やゴールを分かっているか。教師はゴールを説明し、やり方を指導しているか。
コンテンツ	活動する内容は子どもにとってほんとうに価値のあることか。魅力的なものであるか。教師は授業の「ねらい」に迫る内容を選んでいるか。

これらが整うことで子どもたちの学びが充実していくと考えます。子どもにとってのキーワードは「やりたい、やれそう、やってよかった」です。

「主体的・対話的で深い学び」をどう捉えるか？

主体的とは...

子どもが主体的に取り組むためには「見通し」と「振り返り」が必要です。子どもが「今日は何をするの？」と聞くばかりの授業では主体的であるとはいえません。また、「これを学んでよかった」と子ども自身が振り返ることができれば、おのずと次の学びにつながります。

対話的とは...

言葉で伝え合う活動は、子どもの発達の段階に応じた語彙力で行うことが大切です。特に小学校低学年では身体表現で伝え合うことなども大切にしながら、段階的に言葉で伝え合うようにできるとよいです。「共有」や「共感」を基本としながら、友達の意見にも耳を傾け、自らの考えを広げ深めることができると思います。

深い学びとは...

これがいちばん難しいかもしれません。しかしながら、音楽科ならではの「深い学び」を実現していく必要があると思います。そのためには、子どもが音楽と出会うときに、「知覚・感受」を伴っているかということが重要です。「感性を働かせながら」という点が置き去りになってはいけないと思います。音楽科におけるアクティブ・ラーニングでは、「知覚・感受」と常にかかわらせながら、子どもが思考・判断し、音楽を豊かに表現したり、深く聴き味わったりすることができるようにしたいものです。

今回は再度「深い学び」について考えるところから始め、高等学校の実践を含めたアクティブ・ラーニングを捉えてみたいと思います。



新連載

パッケンと考える

ことば・ コミュニケーション

【第1回】 I ♥ 合唱！



コメンテーターやナレーターとしても活躍中のお笑い芸人パッケンマッケンのパッケンこと、パトリック・ハーランさん。

流暢に日本語を操り、漢字の読み書きも堪能。おまけにハーバード大学時代にはグリークラブに所属していた合唱マンとくれば、ヴァンが見逃すはずがありません。

今回から3回の連載で、パッケンがことばやコミュニケーション、そして教育についてまで熱く語ります！

親友の誘いで日本へ

—日本にいらっしゃったきっかけについて教えてください。

パッケン：大学卒業後、これといった衝動があったわけではなく、やりたいことも思い付かないし進路も見えていませんでした。そんなとき、僕の中学校からの大親友に「日本に来る？」と言われて「行く！」と。彼は大学のときに広島へ留学していて、卒業後は当時の文部省での仕事が決まっていたから熱い思いがあったんです。一方、僕は彼が好きで、冒険が好きだから、という生ぬるい思いで来てしまいました。お金を稼いで大学の学費

のローンを返済するためと、日本語を勉強してアメリカに戻って生かせればいいかなあという漠然とした目標しかなかったのです。

誰よりも早く、日本語を話せるようになりたかった

—日本語の予備知識はおもちゃだったんですか？

パッケン：大学のグリークラブで『ソーラン節』や『最上川舟唄』などの民謡を取り上げましたが、日本語の意味も分からずに歌っていました。当時、『最上川舟唄』は、川を行く舟の歌だということは知っていましたが、どの単語がそれぞれ「川」「舟」

「唄」なのかは分からなかったんです。英語に訳すと“The Mogami River Boatman’s Song”と、たまたま日本語と同じ語順なんだけれど、全ての日本語がそうとは限らないし、「モガミガワ」が「モガミ・ガワ」か「モガ・ミガワ」なのかも分かりませんでした。

——来日してすぐに、言葉を勉強しなくてはと思われたのですか？

パッケン：僕は英会話学校の講師をするつもりでしたから「日本語を話せなければいけない」という思いはありませんでした。たまたま福井にポジションが空いていて講師の仕事は順調にいきましたが、日本語に関しては「話せるようになりたい！」という僕の思いが強かったからできるようになったんだと思います。僕は「人間は外国語を覚えられるものだ」と思っていて、「人間にできることなら僕にもできる！僕は人間の中で早いほうだ！絶対、人に負けないぞ！」とか、「一緒に来た外国人より早く日本語を身に付けて、英会話学校の先輩もすぐに追い抜くぞ！」という競争心がありました。嫌なぐらい自分に対するプライドが高いのだと思います。

日本語は苦勞したけれど、英語のほうが難しい？

——日本語の習得でご苦勞なされたことはありますか？

パッケン：いちばん苦勞したところは、イントネーションです。小学校に通っている僕の子どもたちは、僕よりはるかにイントネーションがきれいです。僕のほうが語彙力はあるし、漢字も読めるし、きれいな日本語もしゃべれるけれど、イントネーションは子どものほうがうまい。4～5歳までに身に付けたものと、そのあとで身に付けたものの違いですね。

加えて、かつて苦勞したのは漢字です。最初はやっぱり壁にぶつかるんですが、漢字は一度覚えるとその後は新しい日本語を身に付けるのがすごく早くなるから、逆に漢字のない英語を覚えるほうが難しいと思います。例えば“evacuation”、「避

難」という意味の単語を聞いたときに、“eva”も“cua”も“tion”もそれぞれ意味がピンとこないため、どういう意味なのか分かりにくいですが、「避難」の漢字を見れば「難を避ける」とすぐ分かりますよね。「冷蔵庫」もそうです。“refrigerator”の“re”は「再び」、“fridge”は「冷たい」、“-ator”はターミネーターのように機械に使う言葉。組み合わせれば分かるのですが、それぞれのパーツは漢字の「冷」「蔵」「庫」のほうがすぐに理解できます。こんなに難しい英語が世界の共通語になっていて、ほんとうにスミマセン！

——漢字を覚えるのは日本人でもなかなか大変です。パッケンは日本語も流暢ですし、ただただ驚くばかりです。

パッケン：さっき申し上げたとおり、人は学習能力をもつ動物です。言語もそうだし、音楽もそうです。僕は自分の日本語能力に自信がありますけれど、別にそこまですごいとも思いません。この間話題になったトランプ氏の勝利宣言を同時通訳できたことは、僕にとってちょっとうれしいことでしたが、普段からやっているお笑いの漫才やコント、司会、コメンテーターの仕事のほうが難しいです！それなのに、みんな同時通訳をしたということに「わ～！（拍手）」って。僕のほんとうのスキルはそっちじゃないのに。



イラストレーション：小島真樹



人それぞれの学び方、 才能を引き出してほしい！

—日本語は、先生に付いて習ったのですか？

バックン：独学が10、先生が0です。そう言うときと生意気だと思われそうですが、外に出かければ、1億人の先生がいます。指導者という肩書きのある先生には付いていませんが、友達、生徒、同僚、サラリーマン、子ども、いろいろな肩書きをもっている先生が計り知れないほどの日本語を教えてくださいました。お金は払ってないですよ。ときどきごはんぐらいはおごりましたが。このインタビューだって僕にとっていい練習になっています。

—そういう発想の転換と、モチベーションの高さ、前向きに捉える姿勢が素晴らしいですね。

バックン：僕は、小中高と授業がつまらないと思っていたのですが、課題を出されて燃えるタイプだったんです。先生がよく僕のことを理解してくださって、周りの生徒より多くの課題を出してく

れたり、僕が授業中に上の空になると「パトリック〇〇して、皆に教えて」と指示してくれたりしました。日本の教育は世界トップクラスだと思いますが、ぬきんでる才能をもっと引き出すようにしてほしいです。「ぬきんだす」とは言わないかもしれませんが、ぬきんだしてください！とぜひ先生方に伝えたいです。多くの逸材を育ててください。

男声合唱のとりこに

—ハーバード大学でグリークラブに入ったきっかけは？

バックン：僕の母は音楽を勉強していて、ピアノの先生をしながら今も地元のコーラスでソリストをしているぐらい、ほんとうに歌がうまいんです。そんな母の影響で幼稚園から高校まで聖歌隊で歌っていたので、大学へ行ってもやっぱり歌いたいと思いグリークラブに入りました。そうしたら「こんなにすごい合唱団がハーバードにあるんだ」と驚きました。アメリカでも最高レベルだし、全国の合唱団のコンクールにもゲストとして呼ばれるんですが、僕はそこまで男声合唱団というものの自体を全く知りませんでした。

その頃、バレーボールもしていましたが、どちらを優先するか迷っているときに、けがでバレーボールができなくなってしまって、合唱に集中することになりました。団員だけではなく、副部長や部長を務めたり、合唱団の中のア・カペラ団体で

バックン's
Column

アメリカ大統領選挙

日本でも大きな話題となりました、今回のアメリカ大統領選挙。皆さんご覧のとおり、ほとんどの有識者、解説者、そして僕の予測も外れました。でも、予想外のことが起こったということとは、反省しつつ次に備えなければいけないということです。2017年1月には大統領就任式が行われます。体制がこの先どう転ぶか、大きな予測はまだまだできないと思います。僕も謙虚に受け止めようと思います。



も歌ったり…。僕の大学の思い出の半分ぐらいがグリークラブになりました。いい出会いでした。

印象深かったのが、最初のリハーサルのときに倍音を教えてもらったこと。60人の大学生が1つの音を出していると、1オクターヴ上、さらにその上の音も聞こえるんです。まるでホール全体が歌っているようで、「なんだこれは？魔法だ！」と思いました。

—また歌いたいですか？

パッケン：はい。思いますが、昔のように声が出ないし、中途半端に歌うのもせつない。でも、歌うのは気持ちがいいです。ほんとうに特別なものです。混声合唱も好きだけど、男声合唱は別ものだと思っています。また、僕の声は低くて、混声合唱のSATB*のバスだと高すぎるんですがTTBBで低いバスのパートがあると、より活躍できます！低い音を出すと、声が内臓に響く感じがあって、すごく気持ちいいですね。

*ソプラノ・アルト・テナー・バス

日本の合唱はレベルが高い！

—NHK全国学校音楽コンクールのナビゲーターを務めていたときは、共感してお仕事をされていたわけですね。実際に演奏を聴いていかがでしたか？

パッケン：いつも会場で泣いていましたよ。歌にまっしぐらというか、とにかく歌いたいという気

持ちが伝わってきて、僕にとってもよい経験でした。日本の学生はすごいです。たくさん練習しているし、腹筋やランニングから始める高校もありますよね。アメリカの部活は週4時間、大学でも6時間ほどですから、日本はその倍ぐらいかけているのではないですか？

—日本の合唱曲を聴いて、どんな印象ですか？

パッケン：いい曲がいっぱいありますし、西洋音楽と違うものも多い。日本も「モダン西洋クラシック音楽」を引っ張っていると思います。ポップス系もいいです。僕はハーバード大学のグリークラブが歌う『花は咲く』のコーラスヴァージョンが大好きです。以前、Nコンのスペシャルステージで聴いた『手のひらを太陽に』もすごくきれいなアレンジでしたし、『んばば・ラブソング』もとてもすてきでした。ラジオやCMで聴くメロディーでも、小中高の課題曲や自由曲のアレンジはかなり難しく、1週間や2週間で覚えられる曲ではないですね。コンクールで優勝するには、難しい曲に挑戦して歌いこなすのが大変かもしれませんが、僕がかつてグリークラブで苦労して歌えるようになった難しい曲も、今の僕の人間としての深みにつながっていると思います。僕、すごく深いんですよ！



○パトリック・ハーラン Patrick Harlan

芸人・東京工業大学非常勤講師。1970年11月14日生まれ。コロラド州出身。93年ハーバード大学比較宗教学部卒業。同年来日。97年、吉田 真と「パッケンマッケン」を結成。「英語でしゃべらナイト」「爆笑オンエアバトル」などで注目を集める。現在「外国人記者は見た+日本 in ザ・ワールド」でMCを務めるなど、多くのテレビ番組に出演。2012年10月より池上 彰の推薦で東京工業大学非常勤講師に就任し、コミュニケーションや国際関係に関する講義も行っている。著書に『国際交流を応援する本 10か国語でニッポン紹介①～③』（岩崎書店）、『大統領の演説』（角川新書）など。

レポート

ベトナムから お客様を迎えて



昨年の10月11日、ベトナムからお客様をお迎えしました。

現在ベトナムでは、2018年の初等中等教育学習指導要領の改革に向けた準備が進められています。現行のベトナム初等中等教育学習指導要領の音楽教科には、器楽学習の内容が盛り込まれておらず、歌唱、総合的な音楽の知識、音楽理論、ソルフェージュの4項目が教えられているそうです。今回、ヤマハ株式会社が進める、ベトナム初等中等義務教育の音楽教科への器楽教育の導入・定着化に向けた事業の一環として、ベトナム教育訓練省(日本の文部科学省にあたる省庁)をはじめとする音楽教育関係者が来日、日本の音楽教育現場や関係機関の視察が行われ、教育芸術社にも来社されました。

この日の東京は肌寒く、「冬はない」とされる平均気温約27度の南国ベトナムからいらっしゃった4人の方々は、少し寒そうに見受けられました。簡単に社内編集部の様子を見学していただいた後、いよいよ質問タイム。

教科書の著者の選定について、教科書をつくるプロセスについて、教科書改訂時に引き継ぐ教材の割合、小学校1年生からさまざまな楽器を扱うのは難しいのかなど、具体的かつ現実的な質問事項が相次ぎました。

中でも興味深かったのは「教科書を完成させる前に、いくつかのモデル校で教科書を試すことはないのですか?」という質問でした。「日本では検定前の教科書を学校現場で試すことはできません」と回答したところ「それでは効果があるのかどうか分から

主な質問事項

教科書の著者の選定はどのように行うのか？

内容に関する意見聴取やその方法は？（アンケートは行うのか）

教科書をつくるプロセスとは？

実際の紙面での工夫やデザインについて配慮していることは？

教科書改訂時に引き継ぐ教材の割合は？

掲載曲は既存のものか？

指導書はあるのか、またそれはどういったものか？

インターネット上で教科書の内容を見ることはできるのか？

小学校1年生からさまざまな楽器を扱うのは難しいのか？



ないのでは？」という、実に熱いご意見をいただきました。日本では法律で定められているため、私たちは今までの蓄積と現場の先生方のご意見を参考にしながら教科書の改訂作業を進めますが、大改革を進めようとしているベトナムでは、実際に試さないまま新しい教科書の内容を定めることに、音楽教育関係者が大きな不安を抱えていることを強く感じました。

弊社での滞在は1時間半ほどでしたが、どの方も新しい内容の学習指導要領をつくり上げることへの熱意と意気込みに満ちていました。また私たちにとりまして、このようにあらためてご質問いただいたことで、教科書づくりの基礎を見つめ直すよい機会になりました。

日頃は文部科学省から提示される学習指導要領

の内容を、いかに教科書の中で実現していくかということに力を注いでいる私たちですが、今回、ベトナムの新しい学習指導要領の策定にあたって参考にさせていただけるのは、教科書をつくる立場の者としてたいへん光栄なことでした。

ヴァンではこれまで、日本の中華学校や韓国学校を取材してまいりましたが、今後いっそう同じアジアの国々の伝統や音楽教育にも目を向け、より幅広い情報を発信していきたいと思っております。

（ヴァン編集部）

教育芸術社は、文部科学省が展開する「EDU-Port ニッポン」（官民協働による日本型教育の海外展開事業）における公認プロジェクトに採択されたヤマハ株式会社をサポートしています。

Information

2017年に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

研 究 大 会			
10月 October			
27日(金)	第15回 東海北陸小中学校音楽教育研究大会 石川大会 ときめき ゆらぎ そして きらめく	石川県立音楽堂 コンサートホール 他	石川大会実行委員会 事務局 金沢市立長坂台小学校 橋本俊彦 〒921-8112 石川県金沢市長坂3-14-1 TEL 076-243-7561 / FAX 076-243-7564 E-mail to-hashimoto@kanazawa-city.ed.jp
27日(金)	第48回 中国・四国音楽教育研究大会 香川大会 つなげよう 音と心と ときめく瞬間	観音寺市民会館 大ホール 他	事務局 香川大学教育学部附属高松小学校 和中雅子 〒760-0017 香川県高松市番町5丁目1番55号 TEL 087-861-7108 / FAX 087-861-1106 E-mail mako@ed.kagawa-u.ac.jp
11月 November			
1日(水) 2日(木)	平成29年度 全日本音楽教育研究会全国大会 沖縄大会(総合大会) 第58回 九州音楽教育研究大会 沖縄大会 つなげよう未来へ 伝え合おう 音楽・ちむぐくる	沖縄コンベンションセンター 他	平成29年度全日音研全国大会沖縄大会 事務局 宜野湾市立嘉数中学校内 沖音研理事長 松川好伸 〒901-2214 沖縄県宜野湾市字我如古423 TEL・FAX 098-897-6002
10日(金)	第59回 北海道音楽教育研究大会 オホーツク北見大会 響きあい 感じあい 伝えあい 共に感動を	北見芸術文化ホール 他	第59回北海道音楽教育研究大会オホーツク北見大会 運営委員会事務局 置戸町立置戸中学校 校長 伊藤 勝 〒099-1123 北海道常呂郡置戸町字拓殖47番地の1 TEL 0157-53-2260 / FAX 0157-52-3107
10日(金)	第65回 東北音楽教育研究大会 秋田大会 第57回 秋田県音楽教育研究大会 ひびきあう よろこび ～知覚・感受した音楽の“よさ”を分かち合う授業を通して～	アトリオン音楽ホール 他	秋田県音楽教育研究会会長 大仙市立大川西根小学校 校長 田村 忍 〒014-0072 秋田県大仙市大曲西根字小館20 TEL 0187-68-3030 / FAX 0187-86-4606
10日(金)	第59回 関東音楽教育研究大会 栃木大会 実感！ 音楽の楽しさ 分かち合う思い	宇都宮市文化会館 大ホール 他	第59回関東音楽教育研究大会栃木大会 実行委員長 宇都宮市立晃陽中学校 校長 樽井 久 〒321-2116 栃木県宇都宮市徳次郎町1964 TEL 028-665-0042 / FAX 028-665-6096
17日(金)	第59回 近畿音楽教育研究大会 大阪大会 第62回 小学校大阪府音楽教育研究大会 泉北大会 第60回 中学校大阪府音楽教育研究大会 泉北大会 なにわの音魂(おとだま)	NHK大阪ホール 他	第59回近畿音楽教育研究大会大阪大会 事務局 堺市立日置荘小学校内 校長 塩田紀代美 〒599-8114 大阪府堺市東区日置荘西町2-46-1 TEL 072-285-0260 / FAX 072-285-8002



— 新作合唱曲による公開講座 — Spring Seminar 2017

コンクール自由曲向けの新曲発表会「Spring Seminar 2017」を開催いたします。
同声・女声・混声の各2曲(全6曲)を合唱団、司会者、作曲家と学びます。
セミナー終了後「小学校の部」「中学校の部」「高等学校の部」に分かれて、Nコン課題曲のワ
ンポイントレクチャーも行います。

- 日 時：2017年3月28日(火)
12:45～17:20
会 場：横浜みなとみらいホール
小ホール
参加費：4,000円(高校生以下2,000円)
テキスト代含む
- 司 会：藤原規生
出演者：[同声] 佐井孝彰、三宅悠太
[女声] 大田桜子、木下牧子
[混声] 相澤直人、横山潤子
合唱団：八千代少年少女合唱団
(指揮：長岡利香子)
女声合唱団 ゆめの缶詰
(指揮：相澤直人)
harmonia ensemble
(指揮：福永一博)
- Nコン課題曲ワンポイントレクチャー講師：
藤原規生、相澤直人、三宅悠太(小中高未定)
- お問い合わせ：
教育芸術社
スプリングセミナー実行委員会
TEL 03-3957-1168
FAX 03-3957-1740
<http://www.kyogei.co.jp/>